
秋の星

金地院 憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の星

【Nコード】

N3828P

【作者名】

金地院 憂

【あらすじ】

叔母の葬儀の後に明かされる真実。

そのとき主人公は…

紅葉で彩られた山々。

その間を流れる清流。

叔母の遺影を見つめながら、一昨年に叔母と二人で行った京都を思い出していた。

写真嫌いの叔母が、なぜかあの時だけは大人しくレンズに収まった事を覚えている。

葬礼がすべて済むと、会場には数える程の親戚しか残らなかった。

叔母の姉である母は四年前にこの世を去った。

月に一度の乳ガン検診を欠かさなかった母は、皮肉にも末期の子宮ガンで命を落とした。

僕と父だけになった我が家の家事を、叔母は毎週引き受けてくれた。

親族で集まる時には必ず遊んでくれる叔母が、僕は小さい頃から大好きだった。

しかし一方で他の親戚一同は、クラブを経営する叔母の事を良く思っていない。

叔母に対する大人達の冷たい態度に、僕は子供ながら気付いていた。

僕が片付けを終えて行くと、父は外のベンチで煙草を吸っていた。

口うるさい妻に先立たれた父は、母の葬式の夜に禁煙を止めていた。

「寒くないのか？」

父は何も答えなかった。

僕は着ていたコートを脱ぎ、昔より小さくなった父の肩に掛けてから隣に座った。

「今夜は星がよく見えるな。」

不意に父が口を開いた。

「うん。」

僕は白い息を吐いた。

「…叔母さんがお前を連れて来た夜も、よく星が見えたなあ。」

「……………は？」

「叔母さんは…お前の本当の母親だ。」

僕は状況が飲み込めない。

夜空を見上げたまま父は続けた。

「あの頃まだクラブで働いていた叔母さんは、子供のいなかった私たち夫婦の所に、音信不通になった男との間に出来たお前を預けたと言ってきた。」

「嘘だろ…」

「不妊治療を受けていた私たちは、快く受け入れた。しかし、それがいけなかった。」

その一ヶ月後に叔母さんと連絡が取れなくなった。」

「それで？」

「お前の二歳の誕生日に、叔母さんが家に訪れた。」

音信不通になっていた男…お前の本当の父親が、人を殺して刑務所に入ったんだ。

人殺しの子供としてお前を育てる事を避けるため、私たちの子供として育てて欲しいと頼み込んできた。

さすがに私たちは戸惑った。

しかし叔母さんの熱心な態度に折れて、私たち夫婦は、お前を引き取る決心をした。」

「そんな…」

「叔母さんが息を引き取る直前、これを渡された。」

父は懷から封筒を出した。

僕は焦る気持ちを抑えて、封を開けた。

中には手紙が入っていた。

「この手紙を読んでいるという事は、もう私の葬儀は終わったのでしょうか。」

ご苦勞様でした。

言いたい事はたくさんあるでしょう。
恨まれても仕方ないと思っています。

でもこれだけは信じて欲しい。
心からあなたを愛していました。
一時も忘れた事はありません。

集まった親族の中にあなたを見つけた時、母親として抱きしめてやりたかった。

無垢な目で私を見つめ、”叔母ちゃん”と声をかけてくるあなたを見る度に、胸が塞がる気持ちでした。

二人で京都に行った事、覚えていますか？

あの三日間は、私の人生で最も素晴らしい時間でした。

ただ、あなたは私を”叔母さん”と呼んでいました。

『お姉さんと呼びなさい！』と冗談めいて答えていました。

本当は、一度でもいいから”母さん”って呼んで欲しかったな。
それが唯一の心残りです。

あなたの人生は、他の誰でもないあなた自身のものです。

体に気をつけて、悔いのないように精一杯生きてください。

あなたの幸せを祈っています。」

僕が手紙を封筒に戻すと、父が初めてこちらを見て言った。

「今日までずっと叔母さんに口止めされていた。」

勘違いしないで欲しいが、俺はお前の親父だからな。」

「…当たり前だろ。」

僕はベンチから立ち上がった。

「明日から夕食の当番はどーするか。」
父がわざとらしく言った。

「…じゃんけんだろ。」

僕はそう答えて式場の中に戻った。

会食の名残は、ほとんど片付け終わっていた。

遺影の中には、”母さん”が京都の紅葉を背に笑っている。

今度の秋には、”父さん”を連れて行こう。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828p/>

秋の星

2010年12月9日13時01分発行